高杉鬼遊川柳句集

序文

橘高薫風

高杉鬼遊、本名は久。これを音読みにして雅号にされた。温和な人柄なのに鬼の一字を取られたのは理由があってのことだろう。

そういえば頑固なところもあり、私には、「なるほど、なるほど」と受け答えして下さっていたが、それがワンパターンだったから、そんなこと聞くか聞かぬか分からんぞと言った気分もあったらしい。

居酒屋へ入っても、関東煮にスジが無いと機嫌が悪く、独り言の愚痴が出る。食べ物にも頑固だった。

昭和五十年代の半ばから平成になるまで、川柳塔の推進力になったのは、会計担当の鬼遊さんと編集の谷垣史好さん、私の三人で、三日にあげず事務所へ詰めて仕事をこなし、西尾栞主幹を盛り立てた。川柳塔の鼎の三本足であった。

鬼遊さんは川柳だけでなく、詩も時折書いていたらしいが、次の二編は鬼遊さんの川柳を理解する上でも容易であろうと思われるので引用する。

自　転　車

向いのはるちゃんが自転車を買ってもらった
指をくわえてそれを見ていても
同じように買ってもらえないことを僕の眼は知っている
下町の散髪屋の五男坊に生れ
八人もいる子供の着物や食い物の量は
銭勘定をする父の顔色からして
自転車を買ってくれとはとても言えない

ある日はるちゃんが自転車を貸してくれた
着物の前をまくってまたがった
はるちゃんがうしろを持ってくれた
力いっぱい踏んだ
自転車は思いもよらぬ勢いで動いた
握っているハンドルがぐらぐらゆれて

どうと倒れた
膝小僧の土が血を滲ませていた
泣いたらあかん
自転車を離したくない一心がもう一度乗った
今度は三回ほどペダルを踏んだ
やっぱり倒れた

夢の中で
すいすいと自転車に乗って
どこまでもどこまでも
風を切って走っていた

銀　杏

父の顔があった
そばに母の顔があった
早く死んだ兄も　中の兄も　長兄も

顔を並べていた
その中に比島で戦死した弟の顔がない

かあちゃん　サトシはどうしたん
とうちゃん　サトシはどこへいったん

ふるさとの湿った墓の下で昔通りの団らんが始まった
父も母も兄たちも喋っているが
わたしには何も聞こえない

地上でぎんなんの落ちる音がする
墓石にカチンとぎんなんが落ちた

これで鬼遊さんの句の庶民性と反戦的な理由が分かる。
そして、八尾から京都の伏見まで、二十年間往き還りの勤めを全うした人間性にユーモアが介在することとなる。それは

春雨へ女房と濡れるあほらしさ

桜なら堺刑務所今見頃

の川村好郎先生の手ほどきを受け、初心時代から須崎豆秋、菊沢小松園という立派なユーモア派の先輩に直に接して、句の研鑽を積まれた結果によるもので、麻生路郎先生を知らぬとはいえ、その血脈を受け継いでいる。

さくら散る四月は鬼の誕生日

八尾ナカタ鬼の館に蛙鳴く

生きのこる鬼に八月十五日

叙位叙勲　遺骨を抱いた日がよぎり

地の底の母までとどく冬の雨

素うどんへ何ですかとは何ですか

ご愛顧に応え欠陥車を発表

富士の山だれが画いても富士になり

定期券いつから笑わなくなった

妻の風邪せめてみかんの缶を切る

如月や江下　北川　作江たち
連翹の黄につらなれる不孝者
政治家とにらめっこなら負けはせぬ
路郎忌だ史好よ酒を飲まないか
吉兆も飲み屋も同じ靴でゆく
冷めしと固いこうこが好きやねん
金平糖　先祖は遠い海を越え
勲章をいっぱいつけている化石
警察の前で走らぬ方がよい
一政のバラ人生はゆたかなり

句集には千句余りが収録されるのであるが、優等生の句ばかりではない。平凡と思える句にほっとさせられるものが多いのだ。それが句集散策のたのしい味なのだから、じっくり鑑賞の実をあげて頂きたい。

こんないい句集を上梓して下さったご遺族の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

平成十三年十一月三日

もくじ

序　文……橘高薫風……3
高杉鬼遊川柳句集
素うどん……11
縄のれん……63
紙風船……113
五色豆……165
レクイエム……217
鬼の道……225
索　引……231
あとがき……高杉千歩……245
父　鬼遊について……高杉力・陽子・織衣……247
編集を終えて……田中正坊……250
著者柳歴……252

言い遺すことば

今回の句集はわが意にあらず。たまたま家族の遺志によるものと思う。

句集、句碑など、存命中に作るものにあらず。

句意不詳、読み人しらずの一句が後人に口誦されれば過褒これに優るものなし。

もって瞑する分の栄とする

平成2年9月20日夜

於八尾中日

息道 識

素うどん

昭和四十二年―五十四年

（一九六七―一九七九）

消えるから雪は刹那を浄く舞い

退院の空は果てしなく青い

鼻ひとつ抜けない馬券にぎりしめ

セーターの胸ふっくらと女　春

負けてたまるか男赤いシャツを着る

色を塗るだけで女が出来上り

素うどんへ何ですかとは何ですか

男一匹パチンコ玉に愚弄され

奥様へよろしくなどと逃げ給う

西成区　焼酎孤独　誕生日

辞めますと言う切り札へああそうか

ご愛顧に応え欠陥車を発表

また来てね雨の鋪道へほり出され

横向いたままで笹舟流される

アポロ飛ぶさんまも食えぬ年なりき

平和主義　軍鶏が言うから信じない

エレベーターガールと僕と二人です

春闘がどうあろうとも釜ヶ崎

ハンガーへ掛ければ背広しゃんとする

置くとこもないのに妻と家具売場

かたつむり今さら家をすてられず

羞ずかしいからひょっとこの面かぶる

湯豆腐がふつふつ嵯峨は時雨なり

お伺いたててタクシーの客となる

西成で社長と呼ばれバナナ買う

さい銭を手付けのように鈴をふり

叙位叙勲　遺骨を抱いた日がよぎり

観世音　一千年を笑み給い

スマートに着てはしたなくガムをかみ

バンザイを叫んだ喉の古い傷

スポニチを頭へかざす外野席

ようかんの厚さを測る目が並び

派手ですと言わずお若いですとほめ

父ありき通天閣といづもやと

台風かそうか公団住宅街

出勤へ天声人語読むゆとり

好調へその後なんにも言って来ず
落武者のように悪酔いたどりつき
吊り革の掌に啄木の詩がゆれ
正しさの通らぬ世なり石となる
太陽が欲しい川のある街　虹の街

カラフルな風に思想が流される

日溜りを見つけた寡婦を笑うまい

プロレスを見るとき父の目が生きる

ぎょうざ食う逢わねばならぬ人もなし

負けまいと薄い財布がレジに立ち

浮き雲は今どの辺りわがいのち

脚を組む観音さまへ掌を合せ

七光エスカレーターに乗って来る

警棒が身体髪膚を乱打する

駄句名句　父の記録として遺す

万博が話題にされて年が明け

枯れてない証しをみせて梅の花

よれよれの背広が似合う詩人です

椿落つ尼僧が語る艶ばなし

遠足の明日へ素直にテレビ消す

落ちてなお椿は五弁くずさない

来年はどこを縮める水着ショー

子の寝顔つくづく祈ること多し

清純で売ってヌードでカムバック

老夫婦パントマイムでことが足り

握手する手の大きさに負けている

紫の袴を遠いものと見る

光らない勲章ぼくの青春だ

警棒は祖先の土を守らせず

既製服ぴったり萬年平社員

クラクション錦を飾る田舎道

王手飛車　煙草の灰が落ちまっせ

鍵っ子へ貨車を数える窓があり

頼まれて指がためらう背のホック

芸術の舞台で踊るバタフライ

神さまが栄えるほどに世が乱れ

水いらず　きつねうどんへ箸を割る

公害を追えばわが社に突き当たり

罪人の如く音痴がひき出され

鯛よりもビフテキにする誕生日

ぼろぼろの旗だが父は手放さず

もめている土地とも知らず春の草

輪の中に清酒一本ある飯場

面倒くさそうに場末のストリッパー

ベトナムの血と泥匂う星条旗

ざくろ割るおんなの業を見る如く

いわし雲　鱗の数とわが罪と

フライパン　さんまの詩を忘れしや

童貞の貌　処女の貌　ハネムーン

初版本　誤植のままで値が上がり

数え歌忘れた路地のアスファルト

職人がネクタイをするめでたい日

置き薬よく効く母も今は亡し

新しい指輪が人の指輪見る

酔眼に美女ばかりなり酒や佳し

大仙陵　民の竈は石油危機

意味もなくただ万歳をして別れ

札束で裏をたたけば軽く開き

まぼろしの兵士は雪の夜戻る

残り酒さげて味方にするつもり

銀行は視線の中で札をよみ
ストできぬ身分が線路歩かされ
ぼうふらが狭い世間を駆けまわり
生き死にや今朝も変らぬ顔洗う
凡夫婦半分ずつの知恵で暮れ

おとうとの骨が還らぬ戦陣訓

敗戦の日から先頭には立たぬ

金平糖　先祖は遠い海を越え

黄昏に貧しかりせば祈るなり

昇給で買う一冊の詩が重い

エンジンの音に驚くねぎ坊主

人一人死んで騒がぬビルの街

一通り振って土産の土鈴買う

売出しが済んで馴染の客が来る

勲章をいっぱいつけている化石

若者にわからぬ恋の枯れすすき

梅一輪　退院の日は近づけり

石をもて追われし村に文学碑

歳知らぬ木暮実千代の艶ぼくろ

ダイヤルを静かに回す火の女

商人の手形へ暦早すぎる

奴凧　妻があやつる糸を張り

核心に触れぬ二人がまだ歩き

満員車おもしろそうにカーブする

古いコートにやすらぎがある父の冬

樟脳よ君と僕とは痩せるべし

乱世の風へ小さな火を守る

傾いた他人の舟を見ていたり

おでんふつふつ外は木枯し

いつかお前も老人になる捨て台詞

亀石がにらむ飛鳥の雨に濡れ

お琴教えます家からの沈丁花

いけずしても美人はやはり美しい

鬼にならいつでもなれる鬼ごっこ

うどん食う隔たりもなしガード下

米一俵ずしりいのちの重きこと

生涯に矢を放つこともなし案山子

十二月貧しき家を攻めに来る

地の底の母までとどく冬の雨

教会のロウソクだから揺れはせぬ

富士の山だれが画いても富士になり

花好きのそれほど花の名を知らず

下り坂小さな花が目にとまり

生々流転　蓮の上なる露ひとつ

落ち椿　夜更けの部屋の耳となる

金持ちの鯉より高き鯉のぼり

ほたる翔ぶあれは亡き母あれは父

定期券いつから笑わなくなった

妻の風邪せめてみかんの缶を切る

警察で見せる涙を疑われ

正月は鬼も疲れて眠るだろう

秋のおと桐いちまいの重みなり

国勢調査確かに俺は生きている

日の丸とはっきりわかる風が吹き

開幕のベル貴婦人は慌てない

ハンカチの白さへ負けたなと思う

大正生れ軍歌に酔うて涙する

忘れ傘それ以後お越し下さらず

生きてゆく台詞を今日もまたとちり

靴下は平和ひだりも右もなし

すり切れるまで働いて男の死

忠魂碑　息子に逢える月参り

大入りの日に税務署がやって来る

政治家の勲一等を信じるか

汗匂う金では食えぬ鮎の膳

生きざまや僧形文殊のあばら骨

窓口の美女ではないが愛想よし

父の日にうちにも一人父がいる

先生に乳房豊かな生徒あり

この夏をまた生きのびる冷奴

沈まないように漂う処世術

海賊の末裔ちりめんじゃこを干す

善人の拳が固いこともある

群衆の中を独りの風になる

一本の葦　暴力へすっと立ち

父の忌を偲ぶ八角時計鳴る

死刑囚のいのちに今日も陽が昇る

魂がその辺にいる喪の明り

凧あげる時だけ父を呼びに来る

福引に強い子供を連れてゆく

雑音と一緒に聴いたみことのり

水死体　時計は防水自動捲き

掃除機の音にあわてぬ父と猫

合格をすれば神様用もなし

戦わぬ男見事に生き残り

目じるしにされて一樹の朽ちられず

村芝居　主役は村の何でも屋

神様が結ぶご縁も出来不出来

鼻すこし高く音楽会の列

尼さんになっても髪は伸びてくる

号令を聞いた哀しい父の耳

人間の墓だ何やら書いてある

香奠の額を仏が聞いている

八月の痛みを知らぬ夏祭り

臆病な男を狙う流れ弾丸

ホステスの手帳は夜の紳士録

野良犬が尾をふって来る人間味

地獄絵の一枚を持ち生きている

恋文へ拝啓と書き詮もなし

駅前のカレーは人を騙さない

結婚の間違い同士めしを食う

パチンコの軍歌に負けた手を洗う

政治欄　朝のコーヒーがまずくなる

取引は一流銀行　当座零

時事放談　憎まれ口も金になり

税務署で冗談を言う出前持ち

エリートへ光るレールが敷いてある

八月の軍旗ゆゆしき風に散る

私小説ゆっくり棺の中で書く

チョコレートぐらいで恋は実らない

応接間忘れたように放っとかれ

新聞紙ときには札も包みたし

少年Aあやめが咲いて母を恋う

王将を狙う勇気は歩にもある

上品な台詞で米を借りに来る

その筋に何のゆかりもなく暮し

家裁までメッキの指輪とは知らず

下町の育ち坂には親しめず

みの虫の一生に似て風にゆれ

ビジネスか一杯だけは酌いでくれ

長所にも短所にもされ一本気

警官に警官がいるニューヨーク

神かけて宣誓をする偽証罪

八月は仏に逢える小芋煮る

水甕を覗くと母が逢いにくる

善人が叫ぶ地球の終るとき

会社より妻が無力を知っている

兄嫁を水鉄砲で苛めよう

保険屋の帳簿に載っているいのち

死ぬ時は順不同なり日向ぼこ

流灯の仏ひしめく夜の川

大阪弁あとから腹が立ってくる

給料のうちなりじっと小言聞く

神様へ背中ばかりの薪能

よれよれの袴がお札売りに来る

あなたより知らぬ乳房が待っている

自由にはなったが年金では食えず

折詰がバランスになる千鳥足

極楽の名簿に僕が載ってない

好きな子の足音を待つかくれんぼ

週刊誌ほどの知識で文化人

プライドがうまいめし屋を通り越し

押し問答する額でなしうどん代

女房に謝ることがまた一つ

仲人に聞かせる琴を弾いている

年金のベンチへ鳩も近よらぬ

上役が替わり蝙蝠うろたえる

正面から来る盃は果し状

トイレまで何度も走る初舞台

織田作が口縄坂をおりてゆく

肩叩く男もいずれ叩かれる

髪型を変えてみたとて妻は妻

空模様てるてる坊主ねむられず

乗換えに寺の石段ほど登り

陸橋の雨は下から降ってくる

月末の妻は魔法をよく使う

縄のれん

昭和五十五年―五十九年
（一九八〇―一九八四）

如月や江下　北川　作江たち

新聞の寝床で人が生きている

戦争のない菖蒲湯の男たち

葉ざくらが働きすぎた目に青い

飢え遠く青年の脚長くなる

鉄兜その下の顔いまは亡き

三越の商品券を陽にすかす

ボーナスを他人が貰う十二月

百八つ鳴ってのどかな靴の音

父の齢こえて寂しい春の酒

靖国へ議員が参る怖い夢

西成の飲み屋でででかい話なり

鬼遊忌のことなど妻と話し合う

群衆の一人一人はお人好し

戦争の好きな奴らを敵にする

ヒロシマの天ふかくする赤とんぼ

バカンスも出稼ぎも持つ紙袋

年金の記事が気になる秋の風

母の名は釈尼妙寂はるかなり

弟よ「戦争展」でまだ会えぬ

クニマモルナンジシンミンタマニナレ

香奠を数える指が愉しそう

四柱推命　終生人に使われる

路郎忌を待つ一人なり師を識らず

連翹の黄につらなれる不孝者

妻とふたり今日あるいのち花の下

鬼の目をさます八月十五日

めぐりきて夏なおくらき原爆忌

啄木のように手を見る暇もなし

八月の仏に水を忘れるな

掃除機のように切符を吸いとられ

色事もそこそこ好きな意気地なし

年金で軽いいのちを温める

落ちこぼれそれでも三度めしを食い

喪中欠礼　今年の夏は暑かった

ブロイラー何考えることもなし

十二月八日そしらぬままで顔洗う

パチンコ屋父に自由な椅子があり

積立の満期に合わせ歯が痛む

善人が棲む闇もあり観音経

八月の蟻にも欲しい夏休み

平和にもそろそろ飽きる自衛論

ルームランナー出世に遠い父の足

政治家とにらめっこなら負けはせぬ

空風呂を焚いても左遷できぬ妻

念仏の手でゴキブリは殺される

あじさいの色は卑怯だと思う

心配なことにパンダの私生活

訃を聞いて他人はめしを食っている

春爛漫チューリップはみな孤独

矢印の向うで死者が待っている

外堀を埋めにやってきた笑顔

保険屋の言う万一が気にさわり

パチンコにまたしてもあう返り討ち

八月の日記と重く生きのびる

招待状手ぶらで来いと書いてない

連翹のいろあざやかに小糠雨

人間の親子を猿に見てもらい

薬屋でうんこのかたさなど申し

長男にまだ嫁がない春の街

考えて大きい方を人にあげ

元旦や総理を知らぬ奴凧

十二月ヒラにはヒラの宴あり

この人を知っていますか野球帽

気の弱い男を囲むあかい羽根

ビール売る子の父としてビール呑み

縄のれん通天閣に空がある

しあわせな余生とおもう冷奴

パソコンの世に営々と辞書をくる

鬼病んで人の情けが背にたまる

病みあがり鬼の気弱を笑うなよ

横文字を訊ねる友が一人いる
バス停の一人このごろ見なくなり
遠い渚と軍靴の音が押しよせる
中流のワインの酔いはさめやすし
することがなくて寝ている訳でない

糸瓜忌や子に遺すもの何もなし

鬼の目にまだ涙あり技芸天

八尾ナカタ鬼の館に蛙鳴く

珈琲の中の一人がレモンティー

保険屋に何を今さら死生観

鬼遊庵二月の鬼よみんな来い

多喜二忌や骨の髄まで二月なり

行くとこも来る人もなく三ヶ日

意気消沈かんとう煮にコロがない

晴耕雨読　年金おりる日を数え

天地無用あの世へ送る白い箱

七月に会える人あり雲の峰

八月を夾竹桃は忘れない

不器用に生きればもっと楽なのに

連翹が咲いておんなの忌がめぐる

五月だな五月ですねと老夫婦

建国祭まだ神さまはご存命

軍艦マーチ黒い車を走らせる

家族合わせのカードが揃う春の宴

古本屋の棚で見つけた鬼の首

病人の手に叩かれる蚊のいのち

踊り子のへそは男をまだ知らず

重役の首は太くておんな好き

作業服きたない金は持っていず

雲型の定規で裸婦を描いてみる

カラオケがうまいビールの味を消し

世直しの踊りにしたい阿波踊り

八月の鳩は思いを深くする

上役がにっこりすると恐ろしい

にんげんの歩ける道が街にない

控え目な仕草おとこの目をとらえ

いいことがなかった父の枯れすすき

始末書を書いてしまえばもう忘れ

ゴキブリのひっくり返るのも演技

踊り子の微笑を少年忘れない

言いわけがまだ決まらない終電車

東大を出ても英雄にはなれず

見せ物にしてはいけない原爆忌

長生きのヒント煙草に書いてある

大臣が主役になった裁判所

弁当にすき焼きがある月曜日

一椀の飯でご先祖仲がよい

にぎりめし一つを拝むときもある

病院の天使お尻へ針を刺す

先輩は軽い財布で無理をする

散髪屋左に回っていた時計

せんそうがやがてはじまる鳥の影

珈琲と天声人語　父の朝

五月よし女の胸の高さから

父さんのねばりパチンコだけのこと

敗戦のいのちつないだ芋の恩

新聞を買うだけに行く駅となり

病院もお寺も近いとこに住み

伝書鳩　味方はとうに死んでいる

スケッチへこれは豆腐と書いておく

先生が叱られている交差点

休日の進軍ラッパは妻が吹く

石段の数に信心ためされる

大臣になる心配はない仲間

男が死んでおんなが消えた港町

失恋も作家はめしの種になり

進め進め神になれるぞ兵士たち

ＳＬのほか少年は撮らぬなり

百点の妻に疲れるキリギリス

質屋から市場へ寄って来る詩人

父の留守まず長男が風呂に入り

妻でないおんなと食べるふぐ料理

天下盗る夢を見ているふところ手

宴会で莫迦になれないのがひとり

正確な時計を持つと遅刻する

警察の前で走らぬ方がよい

子供には継がしたくない漫才師

大根の値打ちを知っているさんま

花言葉とっさに言えるものでない

屑篭に未完の直木賞ばかり

追うことも追われることもない夫婦

革命に遠く漫画とヘッドホン

味方まで騙す見事な落し穴

会社ではユダと仲良くしておこう

短大の晴着はすこし喋りすぎ

食堂は子供を騙す旗を立て

戦争を知らぬひよこが酒を飲み

キタよりもミナミが好きな河内弁

ひれ酒の別れがつらいぼたん雪

戦争の足音がする妻よ子よ

アメリカの盾に子供をしたくない

美しく老いて静かな色ざんげ

表札は俺の名前か確かめる

雄なれば猫まで憎い女史の過去

いいとこへ来たと梯子を持たされる

裏長屋　鼠小僧を待っている

雪になる紙を切ってる舞台うら

妻がこう言っていますという意見

恐山　亡母とは違う国訛り

抜けた歯を捨てる男も忘れよう

裏方がそっと覗いた客の入り

加害者の目に包帯が大きすぎ

気をつけや物を乗せたら落ちる棚

本物を観てきたはなしマチス展

老夫婦なすびはいつも漬かりすぎ

母ありて少年倶楽部買ってくれ

寄せ書の隅に逢いたい人がいる

お茶配ってるのが今日の主役です

笛にまた騙されて出る壷の蛇

口重くヒロシマの夏いくたびぞ

渦まきが二つやんちゃで親思い

刑務所の塀をひらりと越える蝶

刑務所でないがトビタの高い塀

上役へわたしの影がお辞儀する

嘱託の椅子はガタガタ音がする

ヘアピン一つ女神の忘れ物

国守る予算むかしもそうでした

駐在所　島の日誌に異状なし

コトコトと遺骨になって還る駅

裏町に住むキリストはおんな好き

コロッケを洋食として貧しかり

本ものは金で鉛のメッキする

レタスとや何度聞いても名を忘れ

水枕やさしい言葉ばかり聞く

無神論熱い涙はもっている

父という悪い手本が欠伸する

決断をするのはいつも妻である

生魂へお参りでないふたり連れ

島に住み風と心が通じ合う

三吉がまだ生きている新世界

雪舞えば雪が炎になるおんな

歓喜仏おんなは何を考える

三八銃わが青春は弾丸の下

善人も悪人もない自動ドア

進まない時計を持っている政治

警官は見えぬところに立ちたがり

姑はいい人でした通夜の席

たこやきが好きで大阪生れです

三月の税務署へゆく寒い顔

おんなにも階段があり銀座ママ

一人一党あたまを下げることがない

チャンス待つ掏摸も刑事も仕事なり

よく耐えたものだ金婚式が来る

天皇の写真が生きている農家

だがしかし先生と言う憎らしさ

メニューなどみたことのないコップ酒

コロンボが一つだけ訊く帰りぎわ

新鮮な先生が来た分教場

親切な狼がいる地下の街

わが子には兜をきせぬ初節句

居眠りをそっとしておく肩まくら

女子寮の下着が見える青い空

タイガースについては父とうまが合い

そのときは庇ってくれぬ核の傘

エマニエル夫人が好きな男たち

トイレから戻る女を待つ荷物

約束の女が来ない紀伊国屋

虫の声きいてふたりの小宇宙

ある時の少女は父に味方する

青春をかえせと妻が無理を言う

勲章をつけると屑が光りだす

本名を誰も知らないおとむらい

十円で許されている赤い羽根

裏声で軍歌を唄うのは誰だ

防衛費気になる町の散髪屋

日の丸の好きな男ですぐ燃える

新聞を取れとけったいなのが来る

筋書の通りに沈む泥の舟

田を売った金とは知らぬ披露宴

地球儀を回すと海がこぼれます

紙風船

昭和六十年―平成三年
（一九八五―一九九一）

核のない夜明けを鳩は待っている

戦場を駈ける未来も過去もない

親も子も孫も馴染みの街の医者

美しい奥さんなどとあほなこと

骨壷をせともの市で見つけよう

哲学も文学も酔う屋台酒

奢られて身体で返すほかはない

金のない男が軽い北新地

人生が面白くないちんどん屋

六月の雨を余生がもてあまし

大正よ婦人倶楽部が消えてゆく

駅前のうどんでノルマ追っかける
好き嫌いわたしにもいるいやな人
セックスに遠くほとけに近くなる
意外にも第九を歌う友がいる
ご近所に内緒でメロン食べてます

釈鬼遊わが戒名に惚れている

自転車に乗れます職を下さいな

吉兆も飲み屋も同じ靴でゆく

中国の雨期しとしとと兵の夢

冷めしと固いこうこが好きやねん

愛国心よいがボリュームさげなさい

父母の歳はるかに越して誕生日

死ぬよりもエイズにかからないように

らくがきのつもりが個展までひらき

悪人も善人もいる河内弁

勲章をやるとは誰も言って来ぬ

年金でワインが飲めるありがたさ

会社より趣味のバッジがありがたい

よろこびの席へ坊主がやって来る

日の丸を見ると鯨が逃げてゆく

もの欲しい男にやらぬチョコレート

角巻のおんなに逢える雪まつり

海の子の血潮が騒ぐシーレーン

年寄りの話を聴かぬウォークマン

意にそわぬ音でグラスが合わされる

老い哀し畳のへりにけつまずき

山の辺の道に落ちてる相聞歌

水枕干す日は母の顔も晴れ

お帰りと言う目に何時も裁かれる

子ができて鬼のなさけが深くなる

ポスターの桜　去年の花が咲き

階段の多い文化の街に住み

一票の力いくさを嫌いぬく

洋菓子のいちごが媚を売っている

またしても戦　埴輪の目が昏い

どうなろうとも友だちの名は言わぬ
女にはとても優しい髭である
一ぬけた二ぬけて老いの二人きり
銀行の金庫へつづく穴を掘る
一色をふやし明日の虹を描く

押さないで下さい卵を抱いてます

指人形哀しいことを知りすぎる

奥さんにもう聞いてますご栄転

鳩もすずめも人なつっこい無人駅

黒髪はおんなの情け夢二の絵

新しい軍歌が流行らないように
乗換えの度に小さくなる会社
年輪の一つに戦疵がある
花のない草よおまえに空がある
老兵として反戦の旗をふり

駅前の鳩が情けをくれる町
赤紙が突然に来る日を怖れ
端渓の硯と墨が知っている
花道の途中で幕が降りてくる
まっすぐな針で魚を釣っている

一色の笛より持たぬ妻といる

新聞のニュースを古いものと聴き

春の宵　手形忘れている小唄

妻の留守遠い記憶でめしを炊く

母親のようなパートをこき使い

人生はいろいろ七味唐がらし

号泣の八月が来る仏たち

豆腐屋のおつりはいつも泣いている

子にはまだ夢がある玩具箱

ボーナスが出たか隣の換気扇

幸せがいつまでつづく鳩時計

買って来た肉を秤へのせて見る

真実を見るとき両の目をとじる

絵のわかる人と画廊の小半日

愛すべし上手にさんま焼くおんな

政治不信　一揆が走る土煙

宿の下駄うまい珈琲が欲しくなり

にんげんのつくる仏へ手を合わせ

茶箪笥に母の苦労の艶がある

見渡せばどの親戚も貧しかり

まぼろしや武原はんに雪がふる

名曲もおけさも同じチンドン屋

長生きをすればおでんにコロがない

よく撮れたぼくの写真が何時か要る

鬼の面ときどきほしくなる仏

口紅をさせばおんなが生きかえり
顔よりも心といって下さるが
核のないつぎの世紀を信じよう
美人だと言う冗談をまにうける
あれほどの女が連れている男

ありがとう　ああ人生は和にしかず

玉三郎この世に偽が多すぎる

火葬場へ行くバスに乗り生きている

嫁はんに甘いのではない恐いだけ

玄米がいいの煙草が悪いのと

紙風船やさしい人に巡り会う

破られる不安をだいている記録

世界地図ひろげて飢えが見えますか

缶ビール提げて仲間にしてもらう

貧しさに負けたりしない太い指

転勤の鬼へ拍手を送る鬼

老眼鏡　郵便局の弱を借り

忠魂碑　父よあなたは強かった

スナックのめざしは美女で姿よし

まっ白いハンカチ妻がいてくれる

みの虫も考えながら生きている

またしても大きい声に妥協する

世の流れ踊る阿呆になってみる

夫婦茶碗の一つが欠けてどっと秋

木のほとけ石の仏もあたたかし

戦友よ遠い話はもうよそう

手に職をつける大きなべんと箱

低い屋根　妻とちいさな灯を守る

ヒロシマの雲を子孫へ語り継ぐ

朝刊を一番先に読む夜警

肩ぐるま父には父の愛があり

敗戦の日から明るい夜ばかり

今年来る数が気になる渡り鳥

たこやきで親子の絆たぐりよせ

自分史のゲラを柩の中で読む

人さまの金なら時に束で持つ
叩いたらテレビがびっくりして映り
言うことが言える小さな屋根の下
そのうちに読む本だから積んである
来々軒びっくりさせる火の料理

珈琲で出会いうどん屋で訣れ

墓碑名に一字　無と彫る風の中

つるはしの煙に腹が減ってくる

マッチャマチ雛人形も大阪弁

もの忘れ頭の中を風が抜け

ひとりでは来るとこでなし中之島

誕生日こころのなかの母に逢う

始末書で済むあやまちはすぐ忘れ

母と子に政治冷たいものと知り

春の雪　谷内六郎生きている

信号を深夜まじめにひとり待ち

おおきにで今日も一日無事に暮れ

連翹のしあわせ多き花の列

人を焼く煙も春の風にのり

仏壇を閉めて土地売る話なり

舞妓にも好きな人あり五色豆

悪口を肴にうまい酒を飲む

わんぱくが泣く算数の時間割

割り勘で飲む上役へ遠慮せず

憲法の第九条を暗記する

生きるのが下手で死ぬのはなお怖い

値上がりもしない卵と月給と

聴く方が疲れる縁のないはなし

ツインビルぐらいに雲は負けないぞ

宇宙から明るく見えるのは銀座

夫婦とは半端同士でまるく住み

坂の町　演歌のように雨が降り

父になる人が廊下で待っている

字の下手な男も筆を選っている

生きるのもひとり死ぬのもひとりなり

友だちがほしい都会のちぎれ雲

子ができて鬼がミルクをあたためる

メガネかけてめがねを探す秋の宵

葬式の鳩を結婚にも翔ばし

このごろの大人こどもに気を遣い

柿の種いつか敵を討たいでか

好きやねん　それは素顔で言う台詞

父さんの真似をするなと父がいう

激辛のカレーライスを食う平和

ワープロの恋という字はみな同じ

長生きはいいが重荷にならぬよう

残ったら下さい古い札でいい

初舞台それは天満のストリップ

ハトの絵のうしろにタカがいる平和

日の丸を振る出発はもう嫌だ

またしても夫の明日に騙される

忘れるな第五福竜丸の事故

利息では孫のお菓子を買うくらい

白式尉ひとにたわけと言われても

円空仏笑いの底にある気合い

自転車は駅へ拾いに行けばよい

退社ベル帰り支度はできている

絵の中に時代おくれのぼくがいる

ふところの中を他人に計られる

島ぬけのチヤンスはあった無縁墓

父よ子に語ることばを忘れたか

泣き上手あきらめ上手くすり指

たんぽぽはやさしい風を知っている

福の神と動く歩道ですれ違い

死刑囚の一人が死んだ今朝の記事

いつまでも少女ではないバスタオル

阪神が負けて楽しいはずがない

駅裏の酒屋に父の傘がある

単身赴任　家族に何の罪がある

読む本がたくさんあって死ねません

外来語辞典を借りて遺書を書く

でぼちんをぶっつけてガラスだとわかり

浦島の帰った席が空いている

生き恥をさらす薬と万歩計

九官鳥までがわたしをおいと呼ぶ

人の世や噂ひとつが渦になり
西成の消印があり生きている
この金は妻からもらう領収証
地下街に雨の情緒が通じない
直線で天を区切ったビルの街

いのちの残りゲートボールをしています

病院でツギを当ててる父の旗

黒門で河豚いっぴきをはからせる

橋通るだけにお金がたんと要り

妻のもつ紐の長さで遊ぶなり

流灯のゆきつく先に母の岸

父の目に赤提灯は赤信号

赤い表紙の本を兄貴が読んでいる

事故のないように見送る霊柩車

勲章が重くていつもそりかえり

カツ丼をご馳走になる調べ室

考えてなお考えているふりこ

舌を抜く順をロビーで待たされる

お茶の味わかってくれる人が来る

いつからかお金に顔を忘れられ

電話から酒が匂うてくる仲間

王様を泣かすカレーを辛くする

流れ矢と言えばことすむ罪ひとつ

赤紙でないが辞令と書いてある

凡聖一如　釈迦もわたしも天を指す

納得のいくまで登るかたつむり

一政のバラ人生はゆたかなり

均等法などは言わない女王蜂

大切なことをトイレで考える

暇な日は一日もないナマケモノ

田を売った分家をにらむ鬼瓦

ふるさとへ子を見せにゆく渡り鳥

カタカナで書くヒロシマが恐ろしい

立食いのそばで戦士の朝になる

大臣が相手で喧嘩おもしろし

松茸を食べた話をしてまわり

朴葉みそと地酒がうまい飛騨の里

耳底にドラ鳴りやまぬペペルモコ

ドレスアップ主役はママか七五三

果物も男も刺せるナイフです

政治屋の裏を見ましたリクルート

神様の子を身ごもりぬ村祭

時どきは落としてみせる皿回し

モンローの夢　終点で起こされる

昔よかった話ばかりでボケてくる

計算が合わない親の結婚日

喪に服すここは千代田の一番地

少年にたちまち還るラムネ瓶

うれしくも子の樹に父は見おろされ

おとうとの遺骨ではない石ひとつ

五色豆

平成四年―十二年

（一九九二―二〇〇〇）

今日は　ではさようなら風になる

重陽の月を戦地で見た兵士

のど飴をひとつ戴くほどの仲

松茸は毒だ毒だと子に聞かせ

むつかしい顔して社説読んでいる

年金のくらし小さなゴミ袋

やがて消える花のいのちの絵ろうそく

その後が気になる下着試着室

風船がひとつ都会を遁げてゆく

怒りなはれ笑たら負けや消費税

つっかえを外せば男たよりない

恥ずかしい影ひきずって古稀という

珈琲代おんな癒着を嫌うなり

世の中は人情だけでないらしい

四十九キロ肩で風切るほどに痩せ

にんげんが人間らしく生きられず

念仏のかわりに聴いている演歌

にんげんの欲ぶらさがる星まつり

豆のつるもう考えぬ雉子郎忌

大器晩成　駅の階段あがりかね

年金のいのちに暑い夏だった

ゆるせない人にも妻や友がおり

また会えてすこし元気になってくる

鳥獣戯画いまもいじめは変わらない

大正生れ怠けることもままならず

新聞の隅まで読んでいる余生

レーニンの像逆転の空を見る

ハリハリの鯨を探すキタミナミ

土建屋の社長に頼むねこの砂

もう誰も何も言わない消費税

長生きをして金箔の酒に酔い

楽あれば苦あり久しくつづく楽

釈尼妙寂ことしも母の忌を迎え

こころまで貧しくなってどうします

約束をつぎつぎとする余命表

ボーイが来るとお辞儀をしてしまう

政治より燃えるものありプロ野球

世話になる妻だ喧嘩をしてならぬ

湯豆腐のゆれを見ているわが余命

さくら咲くこんなよい日におとむらい

損だ損だと裸で生まれ来しものを

雑草と言う草はない名は鬼遊

送り火のリン鳴りやまぬ父よ母よ

神様へ使いふるしの身をゆだね

どっと使えぬ年金のありがたさ

豆を撒く鬼に一つの窓をあけ

戦争をするなと余命たまわりぬ

贅沢は敵だと今の世を生きる

雑兵のひとり一人に母がいる

いちにちを生きて日記の白いまま

政治家に頼って生きてゆけますか

税務署の冷房を出る炎天下

妻が病み暑くて永い夏だった

戴いた銘酒が秋を待っている

やわらかい方へ傾く急停車

魔女狩りの如くたばこが嫌われる

銭湯の河童　冬至の柚子に酔い

大阪の涙は今もあたたかい

中年や　すこし汚れた雪だるま

月よりも星になれたらなと想い

噴水よ夏の疲れのないように

大丈夫ですか　わずかな預金帳

パソコンに置いてゆかれる日が近い

丹波屋のおはぎを鬼が買って来る

飾るものほかにないのか髪を染め

いくさから逃げる枯れ野の果てまで

たけのこを食べる今年も生きている

それなりの勇気さんぱつ屋をかえる

日の丸を嫌うわたしのあまのじゃく

日が昏れてまた日が昇る難儀やな

何をしに生かされている葦なのか

京橋の夜をなんにもせずに抜け

銀行が転んでからは腹に巻き

毎日がいのち三年日記買う

一泊二日　鬼が薬を持ってゆく

寒の冷え鬼がいただく鬼ごろし

誕生日おなじ四月のお釈迦さま

水のあるうちはしばらく生きられる

しゃんとせい　せめておんなの前だけは

征くことはないが戦はそこにある

来たわよと訪ねてくれる人があり

戦死者を弟にもつ老いの冬

西行とおなじ想いや花の下

先に来た料理をみなに眺められ

愚かさの程度がわかる核の数

友だちがたんといるので生きられる

北国の海をしばらく見ていない

お詫びから始まる便り筆無精

無花果を食う残酷に手を汚し

落合も野村も去りぬプロの秋

黄の花の不思議　黄色い蝶が來る

噫たばこやめるに何の志

禁煙をしたのにそうかとも言わぬ

好きなことどれだけしたか誕生日

人の世に馬鹿と言われるむつかしさ

あの世への入口があるお仏壇

病には負けぬが老いにはかなわない

盆帰り仏に暑い夏だった

空爆をするよりほかにない面子

長いこと貧乏したが孫もでき

長生きをした甲斐があり記事になり

死ぬというまだ残ってる大仕事

忘れえぬひとりを憶う花水木

誕生日せめて散髪して迎え

爪切って一日ほかに用がない

嫁はんに叱られ部下を叱りつけ

ゲルニカの絵を忘れない二等兵
おとむらい他人は酒を飲んでいる
詩を作る人でうすぎたない暮らし
ゴシップのないタレントで忘れられ
友だちの好きなラガーが冷えている

ハンカチに蝶が翔んでるハナエ・モリ

天の声　地の声　天安門の石

長すぎて蛇はとぐろを巻いている

メルヘンの夫婦で米の値を知らず

命日に河童が祀る清水昆

拝啓と書いてつづかぬラブレター

秋の夜長　光源氏を待ちわびる

母に会うそれだけでない秋まつり

おばはんがバレーを習うレオタード

しあわせに目を閉じている風呂の首

先生も巡査もむかし恐かった
神様が聴こえるほどに鈴をふり
何でやねん駐車はわたしだけでない
容姿端麗あたまの程度には触れず
税務署の目にどの店もよくはやり

病人は見舞いの嘘を知っている

親切な医者で薬をたんとくれ

わらべ歌きこえる京の五色豆

先生はチョークを投げる技を持ち

一年一組席を同じくした縁

これはこれは美人の横が空いている

ひとまわり大きくなって鬼が来る

人間の檻に危険と書いておく

あなたでも社長になれる本を買う

結婚もしないひとりの死を送る

憂国の檄なまぐさしバルコニー
当分は紀子さんを追う週刊誌
あげまんの力をぼくは信じます
脳味噌がぶつぶつ沸いた炎天下
マツタケを見に阪急の地下売場

想い出す聖戦という人殺し

人生ももぐら叩きも後手ばかり

素うどんに葱のみどりがよく似合う

表札は連名にする小さい城

公然と樋口可南子の写真集

千手観音　役にたつ手は二三本

飲んで寝て明日を考えたりしない

台風に包む位牌とにぎりめし

救急車　不幸を覗く人だかり

奥さんの顔色を見る菊花賞

アッシーと言われてまでも尽くす恋

ひとときを原田泰治の絵に遊ぶ

金持ちへ補てん貧しい人にない

酢昆布を噛み噛み猿之助を観る

することもないのに猫も起きて来る

にんげんに等級がつく文化の日

よいことがこんなにつづくはずがない

あきもせず一夫一婦の内裏雛

落ちこぼれ集めて塾がよく稼ぎ

パチンコのネオンの一字パが消える

修行には暖かすぎるお水とり

謝恩会　弟子よ華やかすぎないか

老いふたりいのちの限り響き合う

病み上がり妻にやさしくなりました

下町をリズムに乗せるチンドンヤ

忘れ物コーナーにいたお父さん

母の日に母を知らない白い花

登校拒否なにを今さら五日制

福井さんのおっしゃるとおり傘を持ち

ご近所の手前セビロをきて出かけ

有名になり　せんべいに名を遺す

一坪の庭で仏に四季の花

今年また知覧の町のさくら咲く

一杯の水を下さいきのこ雲

買物をするたび惜しい消費税

世直しへ次の選挙がおもしろい

写真集りえも可南子も売れ残り

世界地図おろかな国が血で染める

一匹の蝿がボーイを困らせる

踏んだのがおんなで僕が言うごめん

会社ではいとわず汗をかく夫

よその子の育ちが早いランドセル

松茸はあきらめました栗ごはん

そのうちに消える命をつい忘れ

税務署の紙一枚が恐ろしい

青春はいいな林檎のまる齧り

いちにちのいのちの残りゴミ袋

火の車うちとは違う二月堂

老い二人　近所のさくら見に出かけ

大臣がかわり世間が変わらない

変わりばえしないよ妻の美容院

川が消え人の情けも変わる街

やんわりとしたものを踏む夜の底

寸陰を惜しむほどには何もせす

水平線の向こうに消えた赤い靴

水を売る今に空気も売るだろう

すきやきへきぬこし豆腐叱られる

兵馬俑いくさ嫌いが一人いる

突風にわたしの絵馬が裏返る

次の世の妻は同じと思えない

千羽鶴だれも数えたことがない

陰ながらお見送りするおとむらい

地震にも困りサリンにも困る

かぶと虫ずいぶん出世したもんだ

薬局はどこにあります旅の宿

クーラーも夫も機嫌わるい夏

粋筋もかわる宗右衛門町の雨

とび抜けて出すぎた杭は叩かれず

ハンガーにいつまで掛けてある父よ

一冊の辞典ひねもす豊かなり

晩酌をそろそろ燗にする秋だ

ふるさとの井戸で先祖にお会いする

詩の本を貸した彼女も嫁きました

仏さま今日はおでんをたきました

日本語のわからぬ鯛に祝われる

いやな顔したことがない地蔵さん

あれも毒これも毒だと生きづらし

将来を孫に賭けてる虹ひとつ

カタカタと奥さんを呼ぶ鍋の蓋

ぐうたらな鬼　極楽へ迷いこみ

退職金たこやき屋ならできそうだ

偶然がまだやって来ぬ宝くじ

大阪の雪に寝ている子を起こし

ロッキングチェアで悪い夢を見る

右を向けいうから左向いてやる

バイキング戦後の飢えをわすれたか

万灯会あの世もさぞや暑かろう

母ちゃんの下着は誰も盗まない

うどん屋の恋も新鮮ではないか

天の川いじめにあった流れ星

一票を狙う笑顔だ油断すな

夕めしはまだか夫が吠えている

法善寺　パワー戴く水を掛け

何となくそんな気になり遺書

やわらかいてのひらだった終列車

さくら咲くまでは生きよう誕生日

表札が傾いてますお父さん

下手くそな刀と思う斬られ役

地獄にも温泉があり如何です

あの世でも待って下さる塔がある

何時か死ぬ人と人とが笑いあい

これというものもないのに皿の数

老兵の棘　八月にうずきます

ヨシモトで笑うが家で笑わない

くらやみの底でいのちをあたためる

気のよわい鬼で毎晩酔うている

しあわせな一日　仏壇を閉じる

曼陀羅は仏の国の遊園地

ホルモンが匂うわたしの好きな駅

手を打ってわが人生はこれくらい

レクイエム

物故川柳人を偲ぶ

旭町　豆秋さんが酔うてはる

あの世から多久志名で来る丹波栗

小松園きたので句会始めます

梅里さん山中節をやってぇなあ

大萬で好郎はんを待つあわび

改札を先頭切って出る路郎

何よりも梅志句評に載る一句

子の病い母親叱る生々庵

森繁の櫞が届く春巣さん

句会への誘い白柳さんと旅

ひばりではない牧人さんの声

軸吟はいつもつたない摩天郎

串カツを食べに行きまひょ一三夫さん

駅前で美人の美代とのむ珈琲

美しく傍島静馬老いたりき

葵水から賀状はまだか甲寅

あの世でもそろそろかしこ福寿草

遍路笠　若菜香林風になる

スケッチをする楽しさや古方さん

香奠の敵をとった耕花さん

たまつくり句会たのしいネックレス

霊柩車パンクさせた善紫さん

酔々を待つ全集と雛人形

お立ち酒　丹波篠山ヒゲの無鬼

おとこはんですか潮花のおんな舞

白い杖あの世の闇を斬る亜鈍

飛騨の旅　化石を探す弘生さん

肖二綾珠　好きなればこそふたり連れ

大山の雄つれ去りぬ春あらし

温厚な将校なりし文衛さん

路郎忌だ史好よ酒を飲まないか

六道の辻で史好と雀踊子

れんげ田に史好が蝶になって来る

栞忌や唐招提寺うちわまき

俊平も冬二も消えた世紀末

鬼の道

さくら散る四月は鬼の誕生日

休日の鬼なりポルノ映画見る

よく眠る鬼で妻からうとまれる

冷蔵庫すぐ間にあわぬ鬼の餌

鬼の股引カラカラ電気洗濯機

インスタントコーヒーに鬼は騙される

欠かさずに天声人語　鬼の朝

自転車で米買いにゆく鬼で

妻の肩揉むこともあり宵の鬼

榊原郁恵を忘れない鬼で

雨の中　鬼が出かける投票日

むかしから鬼の嫌いな多数決

勝つことは思いもよらぬ鬼の背な

気の弱い鬼で何度も振り返る

外食へ妻を誘わぬ変な鬼

お喋りなおんなを嫌う夜の鬼

妻も子もだれにも見せぬ鬼の地図

いっぴきの鬼まぎれこむ阿波踊り

五本目のたばこを鬼は喫いはじめ

軍鶏の背に鬼の涙腺ふとくなる

四十六キログラム何を為しうる鬼なるぞ

天井に鬼の呪文が貼ってある

闇市の鍋の匂いが鬼を呼ぶ

生きのこる鬼に八月十五日

火の玉を抱いて墓まで鬼の道

「高杉鬼遊川柳句集」索引

〔あ〕

噫たばこ……一八五
愛国心……一一九
愛すべし……一三〇
赤い表紙……一五七
赤紙が……一二七
赤紙でないが……一五九
秋のおと……四二
秋の夜長……一九〇
あきもせず……一九八
握手する……二五
悪人も……一一九
あげまんの……一九四
旭町……二一八
あじさいの……七四
脚を組む……三三
汗匂う……四四
新しい軍歌……一二六
新しい指輪……三〇
アッシーと……一九七
あなたでも……一九三
あなたより……五八
兄嫁を……五七
あの世から……二一八
あの世でもそろそろ……三二
あの世でも待って……二二四
あの世への……一八五
アポロ飛ぶ……一五
尼さん……四九
天の川……二二
雨の中……三一八
アメリカ……九七
ありがとう……二三四
ある時の……一一〇
あれほどの……一三三
あれも毒……二一〇
いいことが……八六
いいとこへ……九七
言いわけが……八七
言うことが……二四〇
意外にも……二一七
生きざまや……四五
意気消沈……八一
生き死にや……三二
粋筋も……二〇八
生きてゆく……四三
生きのこる……二三〇
生き恥を……一五四
生きるのが……二四五
生きるのも……二四六
征くことは……一八二
いくさから……一七九
生魂へ……一〇四
行くとこも……八一
いけずしても……三八
石段の数に……九一
石をもて……三五
戴いた……一七七
無花果を……一八四
いちにちの……二〇四
いちにちを……一七六
一人一党……一〇七
一ぬけた……二二四
一年一組……一九二
一椀の……八八
いつかお前も……三七
何時か死ぬ……二二五
いつからか……一五八
いつまでも……一五三
一冊の……二〇八
一色の……二二八

一色を……二四
一杯の……二〇一
一泊二日……一八一
いっぴきの鬼……二九
一匹の蝿……二〇二
一票の力……二三三
一票を狙う……二二三
一本の葦……四六
意にそわぬ……二二一
居眠りを……一〇九
いのちの残り……一五六
意味もなく……三一
いやな顔……二一〇
色事も……七一
色を塗る……一三
いわし雲……二九
インスタント……二三七
渦まきが……一〇一
宇宙から……四五
美しい奥さん……一二五
美しく老いて……九七
美しく傍島……二二〇
うどん食う……二八
うどん屋の……二二二
海の子の……二二一
梅一輪……二二五
裏方が……九九
裏声で……二一一
浦島の……一五四
裏長屋……九八
裏町に……一〇二
売出しが……二二四
うれしくも……一六四
上役が替わり……六一
上役がにっこり……八五
上役へ……一〇一
飢え遠く……六五
浮き雲は……二二
駅裏の……一五二
駅前で……二二〇
駅前のうどん……一一七
駅前のカレー……五一
駅前の鳩……二七
SLの……九二
エマニエル……一〇九
エリートへ……五三
エレベーター……一六
宴会で……九二
円空仏……一五〇
エンジンの……二四
遠足の……二三
絵の中に……一五一
絵のわかる……一三〇
老い哀し……二二
老いふたり……一九九
老い二人……二〇四
お伺い……一七
追うことも……九五
王様を……一五九
王将を……五四
応接間……五三
王手飛車……二六
大入りの……四四
おおきにで……一四三
大阪弁……五八
大阪の涙……一七八
大阪の雪……二一一
お帰りと……一二二
置き薬……二二〇
奥様へ……一四
置くとこも……一六
奥さんに……一二五
奥さんの……一九六
臆病な……五〇
送り火の……一七五
お琴教えます……二八
奢られて……一一六
怒りなはれ……一六八
押さないで……一二五
押し問答……六〇

お喋りな……三九
雄なれば……九七
恐　山……九八
織田作が……六一
お立ち酒……二三
落　合　も……一八四
落ちこぼれ集めて……一九八
落ちこぼれそれでも……七一
落　ち　椿……四〇
落ちてなお……二四
落武者の……二〇
お茶配って……一〇〇
お茶の味……一五八
おでんふつふつ……三七
おとうとの遺骨……一六四
おとうとの骨が……三三
弟　よ……六八
男　一　匹……一四
男が死んで……九一
おとこはん……三三
おとむらい……一八八
踊り子の微笑……八六
踊り子のへそ……八四
鬼になら……三八
鬼の目に……八〇
鬼の目を……七〇
鬼　の　面……一三三
鬼の股引……三六
鬼病んで……七八
おばはんが……一九〇
想い出す……一九五
親も子も……一二五
折　詰　が……五九
愚かさの……一八三
お詫びから……一八四
温　厚　な……三三
女　に　は……二四
おんなにも……一〇六

〔か〕

母ちゃんの……二二
改　札　を……二九
会社ではいとわず……二〇三
会社ではユダと……九五
会社より趣味……二〇
会社より妻が……五七
外　食　へ……三八
海　賊　の……四六
階　段　の……二三
開　幕　の……四二
買　物　を……二〇一
外　来　語……一五四
顔よりも……一三三
加害者の……九九
欠かさずに……三七
柿　の　種……一四八
鍵っ子へ……二六
核　心　に……三六
核のない……一三三
角　巻　の……二二
革命に遠く……九五
陰ながら……二〇七
家裁まで……五五
飾るもの……一七九
一　政　の……一六〇
火葬場へ……一三四
家族合わせ……八八
数　え　歌……三〇
カタカタと……二一〇
カタカナで……一六一
かたつむり……一六
肩ぐるま……一三九
肩　叩　く……六一
傾　い　た……三七
勝つことは……二三八
買って来た……二一〇
カツ丼を……一五八

金のない……一一六
金持ちの……四一
金持ちへ……一九七
かぶと虫……二〇七
神かけて……五六
髪型を……六二
神様が聴こえる……一九一
神さまが栄える……二七
神様が結ぶ……四九
神様の……一六三
神様へ背中……五八
神様へ使い……一七五
紙風船……一三五
亀石が……三八
カラオケが……八五
カラフルな……二一
空風呂を……七三
川が消え……二〇五
考えて大きい……七六
考えてなお……一五八
歓喜仏……一〇五
観世音……一八
元旦や……七七
寒の冷え……一八一
缶ビール……一三五
枯れてない……三三
変わりばえ……二〇五
聴く方が……一四五
葵水から……三三一
既製服……二五
北国の……一八四
キタよりも……九六
来たわよと……一八二
吉兆も……一一八
黄の花の……一八四
木のほとけ……一三七
気の弱い男……七七
気の弱い鬼で何度も……三三八
気のよわい鬼で毎晩……二一六
鬼遊庵……八一
鬼遊忌の……六七
九官鳥……一五四
救急車……一九六
休日の鬼……二二六
休日の進軍……九一
給料の……五八
教会の……三九
ぎょうざ食う……二一
京橋の夜を……一八一
気をつけや……九九
禁煙を……一八五
銀行が……一八一
銀行の……二四
銀行は……三三
均等法……一六〇
偶然が……二一
ぐうたらな……二一〇
空爆を……一八六
クーラーも……二〇八
句会への……二一九
串カツを……二三〇
屑篭に……九四
薬屋で……七六
果物も……一六二
下り坂……四〇
口重く……一〇〇
口紅を……一三三
靴下は……四三
クニマモル……六八
国守る……一〇二
雲型の……八四
クラクション……二六
くらやみの……二二五
黒髪は……二二五
黒門で……一五六
軍艦マーチ……八八

群衆の中……四六
群衆の一人……六七
勲章が重くて……一五七
勲章をいっぱい……三四
勲章をつけると……二一
勲章をやるとは……二〇
警官に……五六
警官は……一〇六
警察で……四一
警察の……九四
計算が……一六四
芸術の……二六
警棒が……三三
警棒は……二五
刑務所で……一〇一
刑務所の……一〇一
激辛の……一四八
結婚の……五一
結婚も……一九三
決断を……一〇四
月末の……六三
ゲルニカの……一八八
建国祭……八八
憲法の……一四四
玄米が……一三四
ご愛顧に……一五
恋文へ……五一
公害を……二七
合格を……四八
号泣の……一三九
公然と……一九五
好調へ……二〇
香奠の額……五〇
香奠の敵……二三一
香奠を……六九
号令を……五〇
珈琲代……一六九
珈琲で……一四一
珈琲と……八九
珈琲の……八〇
五月だな……八八
五月よし……八九
子ができて鬼が……一四七
子ができて鬼の……一三三
ゴキブリの……八六
ご近所に……一一七
ご近所の……二〇〇
国勢調査……四三
極楽の……五九
こころまで……一七三
ゴシップの……一八八
小松園……二一八
骨壷を……一一五
コトコトと……一〇三
今年来る……一三九
今年また……二〇一
子供には……九四
子にはまだ……一三九
この金は……一五五
このごろの……一四七
この夏を……四五
子の寝顔……二四
この人を……七七
子の病い……二一九
五本目の……二三九
米一俵……三九
これという……二一五
これは……一九三
コロッケ……一〇三
コロンボ……一〇八
金平糖……三三

〔さ〕

西行と……一八三
さい銭を……一七
罪人の……二七
榊原郁恵……二三七

坂の町……一四六
先に来た……一八三
作業服……八四
さくら咲くこんな……一七四
さくら咲くまでは……二二四
さくら散る……二三六
ざくろ割る……二九
雑音と……四八
雑草と……一七五
札束で……三一
三月の税務署……一〇六
三吉が……一〇四
三八銃……一〇五
散髪屋……八九
しあわせな一日……二二六
しあわせな余生……七八
しあわせに……一九〇
幸せが……二二〇
栞忌や……二三四
軸吟は……二二〇
死刑囚のいのち……四七
死刑囚の一人……一五二
地獄絵の……五一
地獄にも……二二四
事故のない……一五七
時事放談……五二
私小説……五三
地震にも……二〇七
沈まない……四六
下町の……五五
下町を……一九九
舌を抜く……一五八
七月に……八二
質屋から……九二
四柱推命……六九
失恋も……九二
自転車で……二三七
自転車に……一二八
自転車は……一五一
自分史の……一三九
始末書で……一四二
始末書を……八六
島に住み……一〇四
島ぬけの……一五一
謝恩会……一九九
釈鬼遊……一二八
釈尼妙寂……一七三
写真集……二〇二
軍鶏の背に……二二九
しゃんとせい……一八二
十円で……一一一
週刊誌……五九
姑はいい人……一〇六
十二月ヒラには……七七
十二月貧しき……二二九
十二月八日……七二
重役の……八四
自由には……五九
修行には……一九九
出勤へ……一九
春闘が……一六
俊平も……二二四
叙位叙勲……一八
生涯に……二二九
正月は……四二
昇給で……二二
肖二綾珠……二二三
招待状……七五
商人の……二六
少年A……五四
少年に……一六四
樟脳よ……二七
上品な……五四
正面から……六一
将来を……二二〇
嘱託の……一〇一

食堂は……九六
職人が……三〇
女子寮の……一〇九
初版本……二九
路郎忌だ……二三四
路郎忌を……六九
白い杖……二三三
信号を……四三
真実を……三〇
人生が……一二六
人生は……二二九
人生も……九五
親切な医者……一九二
親切な狼……一〇八
新鮮な先生……一〇八
心配な……七四
新聞紙……五四
新聞の隅……一七一
新聞のニュース……二八
新聞の寝床……六五
新聞を買う……九〇
新聞を取れ……一一二
死ぬという……一八七
死ぬ時は……五七
死ぬよりも……一一九
字の下手な……一四六
詩の本を……二〇九
詩を作る……一八八
酔眼に……三〇
水死体……四八
酔々を……二三二
水平線の……二〇五
素うどんに……一九五
素うどんへ……一四
好き嫌い……一一七
好きなこと……一八五
好きな子の……五九
すきやきへ……二〇六
好きやねん……一四八
スケッチへ……九〇
スケッチを……二三一
酢昆布を……一九七
筋書の……一一二
進まない……一〇五
進め進め……九二
ストできぬ……三三
スナックの……一三六
スポニチを……一八
スマートに……一八
すり切れる……四四
することが……七九
することも……一九七
寸陰を……二〇五
正確な……九三
晴耕雨読……八一
政治家と……七三
政治家に……一七六
政治家の……四四
政治屋の……一六三
清純で……二四
青春はいいな……二〇四
青春をかえせ……一一〇
政治不信……一三二
政治より……一七四
政治欄……五二
生々流転……四〇
贅沢は……一七六
税務署で……五二
税務署の紙……二〇三
税務署の目に……一九一
税務署の冷房……一七七
セーターの……一三
世界地図おろかな……二〇二
世界地図ひろげて……一三五
セックスに……一一七
世話になる……一七四

戦死者を……一八三
千手観音……一九六
戦場を……二一五
先生が……九一
先生に……四五
先生は……一九二
先生も……一九一
せんそうが……八九
戦争の足音……九六
戦争の好きな……六七
戦争のない……六五
戦争を知らぬ……九六
戦争をするな……一七六
銭湯の河童……一七八
善人が叫ぶ……五六
善人が棲む……七二
善人の……四六
善人も……一〇五
先輩は……八八
千羽鶴……二〇七
戦友よ……一三八
掃除機の音に……四八
掃除機のように……七〇
葬式の鳩……四七
雑兵の……一七六
外堀を……七五
その後が……一六八
そのうちに読む……一四〇
そのうちに消える……二〇三
その筋に……五四
そのときは……一〇九
空模様……六二
それなりの……一八〇
損だ損だと……一七四

〔た〕

退院の空……一三
タイガース……一〇九
大器晩成……一七〇
大根の……九四
退社ベル……一五一
大正生れ軍歌に……一七一
大正生れ怠ける……四三
大正よ……一一六
大丈夫ですか……一七九
退職金……二一一
大臣が相手で……一六一
大臣がかわり……二〇四
大臣が主役に……八七
大臣になる……九一
大切な……一六〇
大山の……二三三
大仙陵……三一
台風か……一九
台風に……一九六
大萬で……二一八
ダイヤルを……三五
太陽が……二〇
鯛よりも……二七
だがしかし……一〇七
多喜二忌……八一
啄木の……七〇
駄句名句……三
たけのこを……一八〇
凧あげる……四七
たこやきが……一〇六
たこやきで……一三九
黄昏に……三三
戦わぬ……四八
正しさの……二〇
叩いたら……一四〇
立食いの……一六一
頼まれて……二六
玉三郎……一三四
魂が……四七
たまつくり……二三二
端渓の……一二七

誕生日おなじ……一八二
誕生日こころ……一四二
誕生日せめて……一八七
単身赴任……一五三
短　大　の……九五
丹波屋の……一七九
たんぽぽは……一五二
田を売った金……一二二
田を売った分家……一六一
地下街に……一五五
地球儀を……一二二
父ありき……一九
父という……一〇四
父になる……一四六
父の忌を……四七
父　の　齢……六六
父の日に……四五
父の目に……一五七
父の留守……九三
父　母　の……一二九
父よ子に……一五二
地の底の……三九
茶筅筒に……一三
チャンス……一〇七
中　国　の……一八
忠魂碑父よ……一三六
忠魂碑息子に……四四
駐　在　所……一〇二
中　年　や……一六八
中　流　の……七九
朝　刊　を……一三八
鳥獣戯画……一七一
長所にも……五五
長　男　に……七六
重　陽　の……一六七
直　線　で……一五五
チョコレート……五三
ツインビル……一四五
月よりも……一七八
次の世の……二〇六
つっかえを……一六八
椿　落　つ……二三
妻がこう……九八
妻が病み……一七七
妻でない……九三
妻とふたり……六九
妻の風邪……四一
妻　の　肩……二三七
妻のもつ……一五六
妻の留守……二二八
妻も子も……二三九
積　立　の……七二
爪切って……八七
吊り革の……二〇
つるはしの……一四一
定　期　券……四一
哲　学　も……一二五
鉄　兜……六五
手に職を……一三八
でぼちんを……一五四
天下盗る……九三
転　勤　の……一三六
天　井　に……二三〇
伝　書　鳩……九〇
天地無用……八二
天皇の写真……一〇七
天　の　声……一八九
電話から……一五九
手を打って……二二六
トイレから……一一〇
トイレまで……六一
登校拒否……二〇〇
東　大　を……八七
童貞の貌……二九
どうなろう……二二四
豆腐屋の……二二九

当　分　は……一九四
父さんの真似……一四八
父さんのねばり……八九
遠い渚と……七九
時どきは……一六三
土建屋の……一七二
歳知らぬ……三五
年寄りの話……二二
どっと使えぬ……一七五
突　風　に……二〇六
とび抜けて……二〇八
友だちがたんと……一八三
友だちがほしい……一四七
友だちの……一八八
取　引　は……五二
ドレスアップ……一六二

〔な〕

長生きの……八七
長生きは……一四九
長生きをした……一八六
長生きをして……一七二
長生きをすれば……一三二
長いこと……一八六
仲　人　に……六〇
長すぎて……一八九
流れ矢と……一五九
泣き上手……一五二
納　得　の……一六〇
七　光……二二
何よりも……二一九
何をしに……一八〇
縄のれん……七八
何でやねん……一九一
何となく……二二三
にぎりめし……八八
西　成　区……一四
西　成　で……一七
西成の消印……一五五
西成の飲み屋……六七
日本語の……二〇九
女房に謝る……六〇
にんげんが……一六九
にんげんに……一九八
にんげんの歩ける……八五
にんげんのつくる……二二
にんげんの欲……一七〇
人間の親子……七六
人間の檻……一九二
人間の墓……五〇
抜けた歯……九八
値上がりも……一四五
年金で軽い……七一
年金でワイン……二二〇
年金のいのち……一七〇
年金の記事が……六八
年金のくらし……一六七
年金のベンチ……六〇
念仏のかわり……一七〇
念仏の手で……七二
年　輪　の……二二六
脳味噌が……一九四
残ったら……一四九
残　り　酒……三二
のど飴を……一六七
野良犬が……五一
乗換えに……六二
乗換えの……二二六
飲んで寝て……一九六

〔は〕

バイキング……二二二
拝　啓　と……一九〇
敗戦のいのち……九〇
敗戦の日から明るい……一二九
敗戦の日から先頭……三三
梅里さん……二二八
バカンス……六八

白式尉……一五〇
葉ざくら……六五
橋通る……一五六
恥ずかしい影……一六九
羞ずかしいから……一七
バス停の……七九
パソコンに……一七九
パソコンの……七八
八月の蟻……七三
八月の痛み……五〇
八月の軍旗……五三
八月の日記……七五
八月の鳩……八五
八月の仏に……七〇
八月は仏に……五六
八月を……八二
パチンコに……七五
パチンコの軍歌……五二
パチンコのネオン……一九八
パチンコ屋……七三
初舞台……一四九
派手ですと……一九
ハトの絵の……一四九
鳩もすずめも……一三五
花言葉……九四
花好きの……四〇
鼻すこし……四九
花のない……一二六
鼻ひとつ……一三
花道の……一二七
母ありて……一〇〇
母親の……一二八
母と子に……一四二
母に会う……一九〇
母の名は……六八
母の日に……二〇〇
ハリハリの……一七二
春爛漫……七四
春の雪……一四二
春の宵……一二八
ハンガーに……二〇八
ハンガーへ……一六
ハンカチに……一八九
ハンカチの……四三
バンザイを……一八
晩酌を……二〇九
阪神が……一五三
万博が……二三
ビール売る……七七
控え目な……八六
光らない……二五
日が昏れて……一八〇
低い屋根……一三八
ビジネスか……五五
美人だと……一三三
飛騨の旅……二三三
日溜りを……二
人さまの……一四〇
一坪の……二〇一
一通り……二四
ひとときを……一九七
人の世に……一八五
人の世や……一五五
人一人……二四
ひとまわり……一九三
ひとりでは……一四二
人を焼く……一四三
火の車……二〇四
火の玉……二三〇
日の丸と……四二
日の丸の……一二
日の丸を嫌う……一八〇
日の丸を振る……一四九
日の丸を見ると……二二〇
ひばりでは……二三〇
暇な日は……一六〇

百点の……九二
百八つ……六六
冷めしと……二八
病院でツギ……一五六
病院の天使……八八
病院もお寺も……九〇
表札が傾いて……二四
表札は俺の……九七
表札は連名に……一九五
病人の……八四
病人は……一九二
ひれ酒の……九六
ヒロシマの雲……二三八
ヒロシマの天……六七
風船が……一六八
夫婦とは……一四六
笛にまた……一〇〇
不器用に……八二
福井さん……二〇〇
福引に……四七
福の神……一五二
富士の山……四〇
仏壇を……一四三
ふところの……一五一
プライドが……六〇
フライパン……二九
ふるさとの……二〇九
ふるさとへ……一六一
古本屋……八八
古いコート……三六
ブロイラー……七一
プロレス……二
噴水よ……一七八
踏んだのが……二〇二
訃を聞いて……七四
ヘアピン……一〇二
ポスター……一二三
兵馬俑……二〇六
平和主義……一五
平和にも……七三
下手くそな……二二四
糸瓜忌や……八〇
ベトナムの……二八
弁当に……八八
遍路笠……二二二
防衛費……一二
法善寺……二二三
ぼうふらが……三三
ボーイが……一七三
ボーナスが……一二九
ボーナスを……六六
朴葉みそ……一六二
保険屋に……八〇
保険屋の言う……七五
保険屋の帳簿に……五七
ポスター……一二三
ホステス……五一
ほたる翔ぶ……四一
仏さま……二〇九
墓碑名……一四一
ホルモン……二二六
ぼろぼろの……二八
盆帰り……一八六
凡聖一如……一五九
凡夫婦……三三
本名を……一一
本物を……九九
本ものは……一〇三

〔ま〕

舞妓にも……一四四
毎日が……一八一
負けてたまるか……一三
負けまいと……三一
魔女狩りの……一七七
貧しさに……一三五
また会えて……一七一
また来てね……一五

またしても戦……二三三
またしても大きい……二三七
またしても夫の……一五〇
まっ白い……一三六
まっすぐな……二二七
松茸を食べた……一六二
マツタケを見に……一九四
松茸はあきらめ……二〇三
松茸は毒だ……一六七
マッチャマチ……一四一
窓口の……四五
まぼろしの……三一
まぼろしや……一三二
豆のつる……一七〇
豆を撒く……一七五
満員車……三六
曼陀羅は……二一六
万灯会……二二一
味方まで……九五
右を向け……二二一
水甕を……五六
水枕干す……一二三
水枕やさしい……一〇三
水いらず……二七
水のある……一八二
水を売る……二〇六
三越の……六六
みの虫の……五五
みの虫も……一三七
耳底に……一六二
見渡せば……一三二
見せ物に……八七
むかしから……二二八
昔よかった……一六三
無神論……一〇三
虫の声……一一〇
むつかしい……一六七
紫の袴……二五
村芝居……四九
名曲も……一三三
命日に……一八九
夫婦茶碗……一三七
メガネかけ……一四七
めぐりきて……七〇
目じるし……四九
メニュー……一〇八
メルヘン……一八九
面倒くさ……二八
もう誰も……一七二
喪中欠礼……七一
喪に服す……一六四
もの欲しい……一二一
もの忘れ……一四一
もめている……二八
森繁の……二一九
モンロー……一六三

〔や〕

八尾ナカタ……八〇
やがて消える……一六八
約束の……一一〇
約束を……一七三
矢印の……七四
靖国へ……六六
薬局は……二〇七
奴凧……三六
宿の下駄……一三一
破られる……一三五
病には……一八六
山の辺の……一二三
病みあがり鬼の……七八
病み上がり妻に……一九九
闇市の……二三〇
辞めますと……一四
やわらかいての……二二三
やわらかい方へ……一七七

やんわりと……二〇五
憂国の……一九四
有名になり……二〇一
夕めしは……二二三
雪になる……九八
雪舞えば……一〇五
湯豆腐が……一七
湯豆腐の……一七四
指人形……二二五
ゆるせない……一七一
よいことが……一九八
洋菓子の……二二三
ようかんの……一九
容姿端麗……一九一
よく耐えた……一〇七
よく撮れた……一三三
よく眠る……二二六
横文字を……七九
横向いた……一五
ヨシモトで……二二五
よその子の……二〇三
世直しの……八五
世直しへ……二〇二
嫁はんに甘い……二三四
嫁はんに叱られ……一八七
よれよれの背広……二三
よれよれの袴……五八
よろこび……二二〇
四十九キロ……一六九
四十六キログラム……二三〇
寄せ書の……一〇〇
世の中は……一六九
世の流れ……二三七
読む本が……一五三
〔ら〕
来年は……二四
来々軒……一四〇
楽あれば……一七三
らくがきの……一一九
乱世の……三七
利息では……一五〇
陸橋の……六二
流灯の仏……五七
流灯のゆきつく……一五七
ルームランナー……七三
霊柩車……二二三
冷蔵庫……二二六
レーニン……一七二
レタス……一〇三
連翹が……八二
連翹のいろ……七六
連翹の黄に……六九
連翹のしあわせ……一四三
れんげ田に……二二四
老眼鏡……一三六
老夫婦なすびは……九九
老夫婦パント……二四
老兵として……一二六
老兵の棘……二二五
六月の雨……一一六
六道の……二二四
ロッキングチェア……二一一
〔わ〕
ワープロ……一四八
わが子……一〇八
若者に……三五
忘れえぬ……一八七
忘れ傘……四三
忘れ物……二〇〇
忘れるな……一五〇
輪の中に……二八
わらべ歌……一九二
割り勘……一四四
悪口を……一四四
わんぱく……一四四

あとがき

高杉千歩
（千鶴子）

『高杉鬼遊川柳句集』をこのように早くお目にかけることができましたのは、言葉に表しようもなく、ありがたく嬉しく存じます。

去る五月五日、西尾栞先生の七回忌川柳大会の折り、田中正坊様、新家完司様から鬼遊句集を是非…と、お声をかけて頂きましたのは、やっと積み上げていた書類整理の目途がついたところでした。

七月二日の路郎忌句会に一年一か月ぶりで出席いたしました。その時、正坊様が「句集を出版するなら、三回忌よりも一周忌にこそ意義がある」と勇気づけて下さいました。そのお言葉に甘えて決心いたしました。翌日、パソコンを購入し、五日から入力を始めました。「人様に何かを頼む時は、自分がすると思って頼め」「人さわがせなことはするな」が鬼遊の信条でした。

「言い遺すことば」（10ページ）、また、薫風先生に頂きました序文の中の「自転車」「銀杏」は、六帖余りの書斎に天井まで積み上げた膨大な数のダンボール箱から見つけ、残しておりました一部です。亡くなる十年も前に便箋に下書きしていたメモらしく、動脈瘤が腹部に見つかった頃です。詩は、昭和五十三年七、八月の作で、鬼遊も忘れていたの

ではないかと思われます。

薫風先生にお見せしたところ、図らずも序文に載せて下さいました。読書三昧でペンをはなさなかった暮らしの鬼遊がどんなにか喜んでいることと思います。先生にはことのほか、ご多忙の中にもかかわらず、最終選もして頂きました。さらに、葬式の日には、柩を担いで下さいました。

正坊様には猛暑の中、五千を越す句から一次選をして頂き、編集から発刊に至るまですべてを完遂して下さり、生前には句集を作らぬと言っておりました鬼遊句集を生んで下さいました。

パソコン入力につきましては、地元の「わくわくプラザ・コンピューター教室」の八尾先生に、購入から指導までお世話になりました。先生のお力添えがなければ、ここまで機器の活用はできませんでした。

生涯の半分を川柳に生き、全く悔いのない人生を送らせて頂きましたことは、鬼遊、そして千歩、息子の力ともども深く感謝いたしております。句集発刊にあたりまして、心から厚く御礼申し上げます。

「ほんまにおおきに、ご苦労さん」

鬼遊の声が聴こえます。今後ともよろしくご厚誼のほど、お願い申し上げます。

平成十三年霜月

父　鬼遊について

高杉　力
（康　一）

一九二〇年生まれの父は、戦争体験者です。しかし、どう見ても争いごととは縁のなさそうな人で、父が中国で戦っていた姿をイメージすることは、とても難しいことです。また、戦後は混乱の中、朝早くから夜遅くまで京都の会社と家を往復しながら、私を育ててくれました。そんな父を有り難く思う気持はありますが、私にとっては、川柳をやりだしてからの生き生きとした鬼遊としての人生の方に、むしろ強く心惹かれます。

全くと言っていいほど、押しつけがましいところがなく、めったに怒ることもない父でしたが、創造的であることの大切さは、父から学びました。私も母も少し川柳をやるので、親子三人で句会に行くこともありました。妻や娘も加わり、親子三代五人で参加した佐賀県唐津の川柳大会は、良き想い出として印象に残っています。まだ現役の職業人である私としては、特に心してそのようなゆったりとした時間を、今後も大切にしていきたいと思います。

消えるから雪は刹那を浄く舞い

私は父のこの句が一番好きです。何度か「句集を出したら」と持ちかけても、頑として受け付けなかった父の生きざまが、この一句に凝縮されていると思います。「えらいたいそなことをしてくれて…」と父には叱られそうですが、多くの皆様に支えられ、句集が発刊の運びとなりましたことを、素直に喜びたいと思います。そして今この句集を手にして頂いている皆様の心の片隅に、鬼遊の句が一つでも残るとしたら、息子としてそれ以上の喜びはありません。

最後になりましたが、薫風先生、正坊様はじめ、お世話になった方々には心より厚く御礼申し上げます。

髙杉陽子

この度、義父の一周忌に、川柳句集を出版することになりました。今、懐かしく思い出しますことは、帰省のたびに作ってくれた「ねぎ焼き」です。「てんかす」と「ねぎ」

だけのシンプルなものでしたが、粉の溶き加減が微妙で、とても真似の出来ない美味しい味でした。

よく話を聴かせてもらい、人生訓も学びました。もう、あの味も、声にも出会えませんが、川柳とともに私の心の中に生き続けることでしょう。

句集に寄せて義父を偲び、それぞれの想い出を記しました。これからも、よろしくお願い申し上げます。

髙杉織衣

（小学校六年生）

おじいちゃんは、鬼太郎通信といって「ゲゲゲの鬼太郎」の絵はがきをよく送ってくれました。今も大切に残しています。

おじいちゃんが、初めて川柳を教えてくれたのは、二年生の夏休みでした。最初に入選した句は「ミニトマトかわをむくのがたいへんだ」です。

五年生二学期まで投句をしていました。「車酔い前転したら治るかな」です。転校をしてからは作っていませんが、五七五は面白くて楽しいから好きです。

おじいちゃんの立派な川柳句集が出来てとても嬉しいです。

編集を終えて

田中正坊

序文や跋文というのは、普通は著者の師とか、先輩にあたる人が書くのが習わしとなっている。鬼遊さんと私とは、年齢こそ二歳しか違わないが、柳歴についてはおよそ半分に満たず、作品に関しては言わずもがなであるが、千歩さんからのたってのご依頼でペンをとった次第である。

今から二十年前、妻がなくなった時、いちばん先に考えたのは、柳歴一年にも満たない彼女の遺句集を編むことであった。今はなき白岩文衛君の助けも借りて、新聞の川柳欄や柳誌に掲載されたものだけでなく、ノートに書きとめてあった未完成の句も含めて、約五百句を収録して『はねぶとん』を刊行した。

後から考えると、よくもまあ〝川柳〟とも言えないものを、おこがましくも出版したと思うが、彼女がこの世に生き、そして文芸的なものをたしなんだ証として、あれはあれでよかったのではないかと、自らを慰めている。

余談が長くなってしまったが、鬼遊さんを偲ぶ追悼文の末尾に、私は「この好作家が

生前、句集を出されなかったのが今となっては惜しまれる」と書いた。これは私の偽らぬ気持で、千歩さんにお会いした時、おせっかいにも句集の刊行をおすすめした。鬼遊さんは川柳塔を代表する作家であるにとどまらず、その作品は、川柳界の財産でもあり、これを埋もれさすにはしのびないと、心から思ったからである。

こうしたいきさつで及ばずながら『高杉鬼遊川柳句集』の編集・刊行をお手伝いすることになった。そして山本希久子さんなど、鬼遊さんを慕う方たちもすすんでこの仕事に協力された。鬼遊さんはこの句集によって、いついつまでも私たちの中に生き続けられるであろうと思う。

髙杉鬼遊柳歴

大正９年４月12日	大阪市西区三軒家に生まれる 本　名　久
昭和40年10月16日	羽曳野病院へ入院
同　41年１月14日	入院中、川村好郎先生指導の「どんぐり川柳会」に入会、初めて川柳を学ぶ 川柳塔社誌友となり、近作柳樽に投句
同　43年10月６日	川柳塔賞を受賞、川柳塔社同人となる
同　52年10月	川柳塔社常任理事
同　63年６月17日	全日本川柳第12回大会で川柳大賞を受賞
平成６年10月	川柳塔社副主幹
同　10年10月	同　　相談役
同　12年12月７日	81歳で死去、法名　浄寛院亮善鬼遊居士

平成13年12月7日発行

高杉鬼遊川柳句集

頒価 2,000円（送料共）

発行所 川 柳 塔 社

〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2－10－16
ウエムラ第2ビル 202号室
電 話 (06) 6629－6914

美研アート 印刷